

山王山遺跡

—共同住宅新築工事に伴う緊急発掘調査報告書—

2021. 4

石川 和雄

盛岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は、岩手県盛岡市山王町64番33外地内に所在する山王山遺跡の発掘調査報告書である。
山王山遺跡第15次調査に係る野外調査は、令和2年11月9日から12月22日まで実施し、調査面積は約140㎡である。室内整理作業は令和3年1月4日から令和3年3月12日まで行った。
- 2 本調査は事業主である石川和雄氏と盛岡市教育委員会との間に締結された協定書に基づき、盛岡市遺跡の学び館が野外調査、出土資料整理及び報告書編集を実施した。本調査に係る費用は、事業主体者である石川和雄氏から支出された。
- 3 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、執筆編集を鈴木俊輝が担当し、室野秀文、菊地幸裕、津嶋知弘、今野公顕、花井正香、似内啓邦、今松佑太、佐々木あゆみ、鈴木郁美が協力した。遺物の実測は、教育委員会事務局歴史文化課神原雄一郎が協力した。
- 4 遺構の平面位置については、過去の調査との整合性のため日本測地系を用い、平面直角座標系X系を座標変換した調査座標で表示した。なお、方位は座標北を表している。
調査座標原点 X-33,500.000m Y+28,500.000m = RX±0.000 RY±0.000
- 5 高さは標高値をそのまま使用している。
- 6 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文中でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（2013小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業（株）発行）を参考にした。
- 6 遺構の名称及び記号は次のとおりである。また「竪穴建物跡」の名称については、『発掘調査のてびき一集落遺跡発掘編一』（2010文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編集）に倣っている。

遺 構	記 号	竪穴建物跡	RA	土 坑	RD
-----	-----	-------	----	-----	----

- 7 本書中の地図は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1「盛岡」の地形図を使用し、5万分の1に縮小・編集したものを掲載している。
- 8 発掘調査に伴う出土遺物及び記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。
- 9 本調査の一部については速報展等で報告しているものがあるが、本書の記載内容をもって訂正する。
- 10 調査体制 - 令和2年度 -

〔調査主体〕 盛岡市教育委員会 教育長 千葉 仁一 教育部長 豊岡 勝敏 教育次長 大澤 浩

〔調査総括〕 歴史文化課 遺跡の学び館 課長兼館長 福田 淳 館長補佐 三浦 志麻

〔調 査〕 文化財副主幹 室野 秀文 文化財副主幹 菊地 幸裕 文化財主査 津嶋 知弘
文化財主査 今野 公顕 文化財主査 花井 正香 文化財主任 似内 啓邦
文化財主事 鈴木 俊輝（※調査・資料整理） 文化財調査員 今松 佑太（※調査）
文化財調査員 佐々木あゆみ 文化財調査員 鈴木 郁美

〔発掘調査・室内整理作業〕（五十音順、敬称略）

及川 亜矢子、菊地 泰乃、高橋 弘子、平川 悠樹、三浦 隆

〔御指導・御協力〕

岩手県教育委員会、石川 和雄、大和ハウス工業株式会社岩手支社

目 次

例 言	
目 次	
表 目 次	
挿 図 目 次	
写真図版目次	

I 遺跡の環境	
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	3
II 調査内容	
1 これまでの調査	5
2 調査経過	5
3 遺跡の基本層位と遺構検出状況	6
4 検出された遺構と遺物	
(1) 縄文時代から古代以前の遺構	10
(2) 古代の遺構・遺物	12
(3) 遺物包含層・遺構外出土遺物	19
III 調査のまとめ	27

写 真 図 版	
報告書抄録	

表 目 次

第1表 山王山遺跡調査一覧	5
---------------	---

挿 図 目 次

第1図 山王山遺跡の位置 (1:50,000)	1
第2図 地形分類と周辺の遺跡分布	2
第3図 山王山遺跡全体図	7

第4図	山王山遺跡第15次調査全体図（検出遺構）	8
第5図	山王山遺跡第15次調査全体図（Ⅳa～Ⅴb層上面）	9
第6図	R D142土坑、ピット	10
第7図	山王山遺跡第15次調査全体図（Ⅲa・Ⅲb層上面）	11
第8図	R A501竪穴建物跡	12
第9図	R A505竪穴建物跡（1）	14
第10図	R A505竪穴建物跡（2）	15
第11図	R A505竪穴建物跡出土遺物（1）	16
第12図	R A505竪穴建物跡出土遺物（2）	17
第13図	R D501土坑、ピット	18
第14図	山王山遺跡第15次調査全体図（最終面）	20
第15図	調査区土層断面図	21・22
第16図	遺物包含層・遺構外出土遺物（1）	24
第17図	遺物包含層・遺構外出土遺物（2）	25
第18図	遺物包含層・遺構外出土遺物（3）	26

写真図版

- 第1図版 山王山遺跡第15次調査南調査区全景、山王山遺跡第15次調査南調査区全景（精査完了）
- 第2図版 北調査区全景、R A501竪穴建物跡全景、R A505竪穴建物跡全景、R A505竪穴建物跡あかやき土器出土状況、R A505竪穴建物跡灰白色火山灰検出状況、R D501土坑全景、R D142土坑全景、遺物包含層具殻文土器出土状況
- 第3図版 R A505竪穴建物跡出土須恵器環・瓶、あかやき土器環、土師器環、R A505竪穴建物跡出土あかやき土器環、土師器環、須恵器甕、R A505竪穴建物跡出土墨書土器、R A505竪穴建物跡出土須恵器甕、R A505竪穴建物跡出土あかやき土器甕
- 第4図版 遺物包含層・遺構外出土縄文土器、遺物包含層・遺構外出土弥生土器、遺物包含層・遺構外出土石器、遺物包含層出土土師器環、遺物包含層出土墨書土器、遺物包含層出土墨書土器（赤外線撮影）、遺物包含層・遺構外出土須恵器甕、砥石、Ⅰa層出土陶磁器

《遺物の表現について》

(1) 土器

- a 土器の区分は、縄文土器・弥生土器・須恵器・あかやき土器・土師器に大別した。
- b 縄文時代早期・弥生時代に属する土器の実測図・拓本の縮小率は1/2とし、その他は1/3とした。
- c 挿図の配列については、器種・器形・出土層位・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- d 土師器の黒色処理されたものはスクリーントーンで表現した。

(2) 石器

- a 剥片石器・礫石器の縮小率はいずれも2/3とした。
- b 石器の展開順序は、基本的に左側に表面（背面）、中央に右側面、右側に裏面（腹面）を配列し、必要に応じて縦断面・横断面を付け加えた。
- c 挿図の配列については、器種ごとにまとめ、層位順に配列した。
- d 礫石器の自然面はドットで表現した。

(3) 石製品

- a 縮小率を2/3とした。

(4) 挿図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

(例) RA369 B層 → RA369竪穴建物跡内埋土B層より出土

(例) G9-B21 VI層

↓ ↓ ↓
※1 ※2 ※3

※1 調査座標原点 $RX \neq 0$ $RY \neq 0$ を起点として、 $X \cdot Y$ 両軸を50mごとに区切る大グリッドを設定し、 X 軸線上を西から東へ $A \cdot B \cdot C \cdots W \cdot X \cdot Y$ （東から西への場合は $-A \cdot -B \cdot -C \cdots -W \cdot -X \cdot -Y$ ）、 Y 軸線上を北から南へ $1 \cdot 2 \cdot 3 \cdots 23 \cdot 24 \cdot 25$ （南から北への場合は $-1 \cdot -2 \cdot -3 \cdots -23 \cdot -24 \cdot -25$ ）と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組み合わせを、大グリッドと呼称した。

※2 大グリッドを2mごとに細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって大グリッド-小グリッドという組み合わせで、遺物の平面出土地点を2mごとに表示した。

※3 遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の挿図中、説明する当該遺構については実線で表現した。また、説明遺構と切り合った遺構については、一点鎖線で表現した。

I 遺跡の環境

1 地理的環境

遺跡の位置 山王山遺跡は、JR盛岡駅より東に約2.5kmの山王町地内に所在する（第1図）。遺跡の範囲は東西約280m、南北約300mと推定され、標高は135～155mである。かつて多くを占めていた畑地や果樹園は減少し、現況は宅地が主となっている（第3図）。

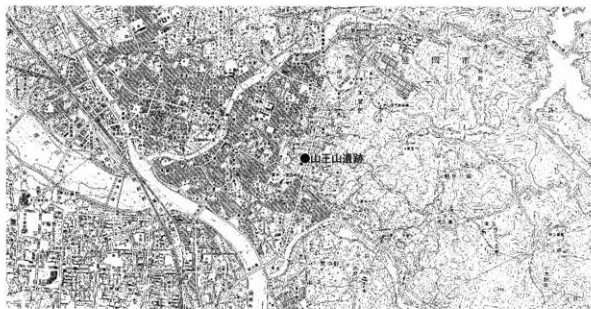
地形・地質 盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（標高2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、古生代や中生代の堆積岩及び花崗岩からなる。北上山地の地質はその構造史より、北部北上帯、南部北上帯とその間に分布する根田茂帯の大きく三つに分けられる。盛岡市東部は、根田茂帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

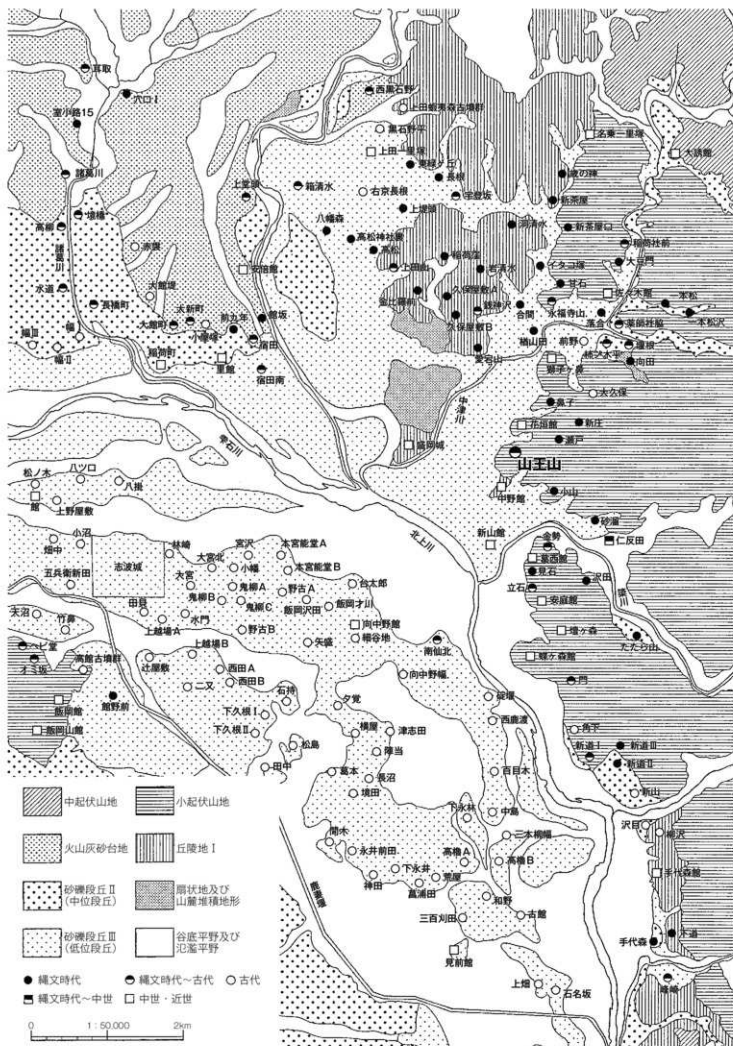
盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。

築川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山（標高1,103m）の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道（宮古街道）に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

山王山遺跡は、岩山や大森山を含む建石山山地の西端部および縁辺部に発達した丘陵地（第2図）に立地しており、下方には中津川・築川流域に発達した低位段丘が広がっている。



第1図 山王山遺跡の位置（1：50,000）



第2図 地形分類と周辺の遺跡分布

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。雫石川は奥羽山脈より東流し、雫石盆地を形成する。その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、その狭窄部を抜けて北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なり、雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだらけ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢市北部まで広範囲に及んでいる。

雫石川南岸には、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。雫石川は、これまでに何度も流路を変えており、雫石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりではなく、微高地上にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない雫石川の下割が周辺山地からもたらされる砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。雫石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、その他にも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。現在は圃場整備や宅地造成が進み、旧地形を留めているところは少なくなってきたが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できるところもある。

2 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の東側に広がる小起伏山地末端には、小山遺跡、砂溜遺跡、仁反田遺跡などの縄文時代の遺跡が多く分布している。また、周辺の丘陵末端には、花垣館遺跡や中野館遺跡などの中世城館が分布している。

旧石器時代 館坂遺跡や四十四田B遺跡で、旧石器時代の可能性のある石器が採取されている。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、縄文時代草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも館坂遺跡・前九年遺跡・宿田遺跡などで縄文時代早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期であるが、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少なく、上八木田I遺跡や畑遺跡などで確認されている程度である。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、雫石川南岸の沖積平野を除く広い地域に分布する。雫V遺跡や大館町遺跡、湯沢遺跡、周辺では柿ノ木平遺跡や川目C遺跡など、主要河川の流域や山麓の扇状地状の地形などに大規模な拠点集落が営まれるようになる。

縄文時代後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。葦内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落、宇登I遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩

期の集落と遺物包含層が確認されている。周辺では、柿ノ木平遺跡や大葛遺跡で後期初頭の小規模な集落、砂溜遺跡や川目A遺跡では、後期の集落及び後期から晩期にかけての遺物包含層が確認されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡数は少ないが、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡では、前期（砂沢式期）や後期（赤穴式期）の土器を伴う堅穴建物跡が確認されている。

古墳～古代 古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で土坑墓群が確認されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と4世紀の土師器が共存して出土し、薬師社脇遺跡では5世紀の土師器、鉄鎌等の鉄器、管玉等の玉類が出土している。

古墳時代終末から奈良時代にかけては、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀前半の遺構・遺物は竹鼻遺跡で確認されている。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であったが、雫石川の被害を理由に、813年～814年には徳丹城（矢巾町）へ移転している。その後9世紀中葉より、陸奥北部の経営体制は鎮守府胆沢城に集約されていく。林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡、堰根遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在しており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子が見える。周辺では、新山館遺跡で8世紀から9世紀の集落、山王山遺跡でも9世紀代の集落が確認されている。10世紀後半から12世紀までの遺跡は少ないが、大新町遺跡や小屋塚遺跡では、11世紀前半頃の掘立柱建物や堅穴跡と土器が出土しており、赤裳遺跡では土器生産工房跡が確認され、数千点に及ぶ11世紀中葉の土器が出土している。これらは儀礼行為に供されたものとみられ、安倍氏の拠点である野川柵・姫戸柵が近くに存在することを裏付けるような調査成果が上がっている。

12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は、落合遺跡・堰根遺跡・稲荷町遺跡などで確認されている。また、奥州藤原氏の影響下にあったとされる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑窯産の大甕が出土しているほか、湯壺経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは渥美窯産の甕が発見されている。大宮遺跡では、大溝から12～13世紀のかわらけが出土している。

中世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、幕城等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のもと考えられている。周辺にも仁反田遺跡、中野館遺跡、花垣館遺跡などの中世城館が存在する。また、現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福土氏が築いた北館（慶善館）、南館（淡路館）からなる不來方城が存在した。

近世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する意匠軍の軍監浅野長政から不來方城において、この不來方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長2年（1597）から盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。その後、石垣補修の発掘調査により、1～5期の変遷を経て現在に至っていることが判明している。

II 調査内容

1 これまでの調査

本遺跡は、平成4年から令和2年度まで15次にわたる調査が実施されている（第1表）。第9次調査は、盛岡地方気象台の建設に伴う事前調査として実施された。調査区は遺跡中央の最も標高の高い場所に位置し、縄文時代中期の竪穴建物跡やフラスコ形土坑が多数確認されている。一部の竪穴建物跡からは、底部穿孔された深鉢を倒立の状態では床面に埋める「伏壺」と呼ばれる土器が数点出土している。また、宅地造成に伴う事前調査として行われた第11次調査では、縄文時代中期のフラスコ形土坑や縄文時代早期の遺物包含層が確認されている。

遺跡東部の緩斜面上に位置する第10次調査では、平安時代の竪穴建物跡や縄文時代早期の遺物包含層が確認されており、第9次調査や11次調査のような縄文時代中期の竪穴建物跡やフラスコ形土坑は確認されておらず、時代によって集落の立地に相違があることがわかる。

回数	所在地	調査原因	面積 (㎡)	期間	検出遺構・遺物
1 試掘	山王町 1	宅地造成	425	1992.11.24-12.21	縄文時代土坑 3
2	山王町 1-2	個人住宅建築	80	1994.11.28	遺構・遺物なし
3 試掘	山王町 49-7	駐車場造成	32	1994.11.29	遺構・遺物なし
4 試掘	山王町 64.5 外	共同住宅建築	120	1996.06.26	遺構・遺物なし
5	山王町 4-2	個人住宅建築	53	1996.07.10-07.18	縄文時代早期～中期土坑 2、貝殻文土器・石器
6 試掘	山王町 7-60	気象台建設	131	1997.09.18-09.30	縄文時代中期遺構・遺物多数
7 試掘	山王町 1-1	宅地造成	47	1998.03.24	遺構・遺物なし
8 試掘	山王町 42-4	個人住宅建築	17	1998.08.20	遺構・遺物なし
9	山王町 7-60	気象台建設	2,000	1998.04.08-08.06	縄文時代中期竪穴建物跡 30、土坑 119、土器・石器
10	山王町 64-1	宅地造成	1,623	1999.09.02-11.13	平安時代竪穴建物跡 15、土師器・須恵器・縄文時代早期土器
11	山王町 56-1	宅地造成	1,400	2006.11.06-12.15	縄文時代中期土坑 12、遺物包含層、土器・石器
12	山王町 64-1	個人住宅建築	163	2008.07.15-09.03	平安時代竪穴建物跡 3、土師器・須恵器
13	山王町 64-1	共同住宅建築	66	2011.05.09-05.12	平安時代竪穴建物跡 1、縄文時代遺物包含層、土師器・須恵器・銅片
14 試掘	山王町 62-1 外	宅地造成	282	2020.04.30、05.01、07	縄文時代遺物包含層、縄文土器・石器
15	山王町 64-33 外	共同住宅建築	140	2020.11.09-12.22	平安時代竪穴建物跡 2、古代土坑 1、時期不詳土坑 1、ピット 16 口、縄文時代～古代遺物包含層、須恵器、あかやき土器、土師器、弥生土器・縄文土器

第 1 表 山王山遺跡調査一覧

2 調査経過

試掘調査 当該地において事業主体者である石川和雄氏・大和ハウス工業株式会社岩手支社から、共同住宅建築に係る事前協議があり、令和2年6月29日付けで発掘届が提出された。隣地での調査結果から遺構・遺物の出土が予想されたため、同年8月5日に試掘調査を行った。その結果、平安時代の竪穴建物跡や縄文時代早期の遺物包含層等が確認されたことから、設計上現状保存が

困難な共同住宅本体部分及び駐車場のL型擁壁部分について、工事着手前の緊急発掘調査が必要とされた。

発掘調査 令和2年11月9日、石川和雄氏と盛岡市教育委員会との間で「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、遺跡の学び館が本調査を行った。調査区は、L型擁壁部分を北調査区、共同住宅本体部分を南調査区とした。調査期間は令和2年11月9日～12月22日、調査面積は140㎡である。

3 遺跡の基本層位と遺構検出状況

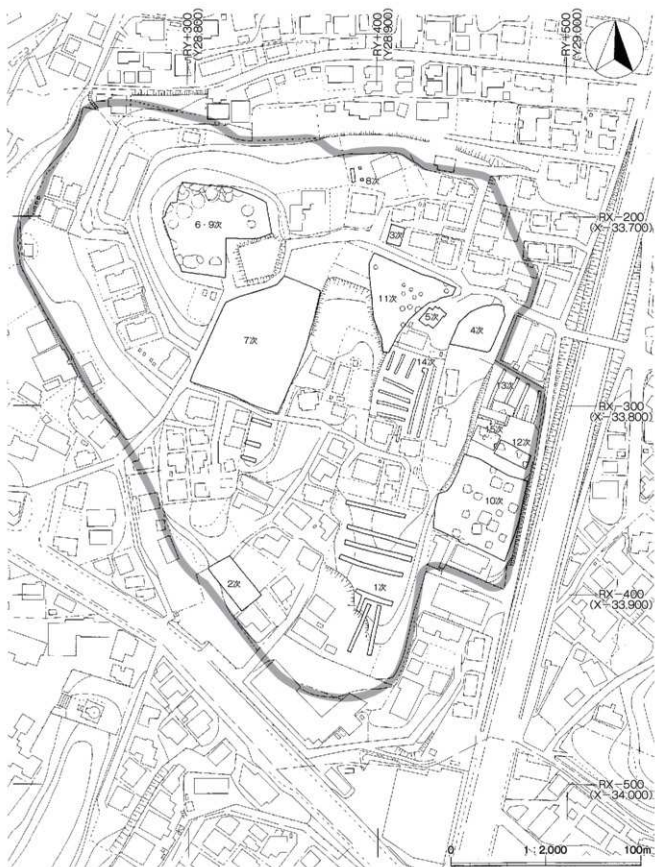
山王山遺跡第15次調査区は、遺跡東部に位置し、第10次調査区の北側、第12次調査区の西側、第13次調査区の南側に位置している（第3図）。調査区全体はかつて果樹園及び畑として使用されていた。調査区内は北西側が高く、南東方向に傾斜する地形で、検出面の標高値は142.400～144.000m前後である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下のⅠ～Ⅶ層に大別される。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ層はそれぞれ2層、Ⅳ・Ⅴ層はそれぞれ3層に細分される。Ⅰa層は表土層である。複数回盛土されている箇所もみられるが、まとめてⅠa層とした。Ⅰb層は旧耕作土である。Ⅱ層は古代の遺物を含む黒色土層である。Ⅲ層はスコリア粒を少量含む黒褐色土～暗褐色土層で弥生土器を微量含み、その上面が古代の遺構検出面である。Ⅳ層はスコリア粒を多く含む暗褐色土層で、Ⅳa層は縄文時代早期中葉の遺物が出土する。Ⅴ層は褐色土層で、Ⅴa層は径1～10cmほどの礫を含み、調査区南東部のみで確認される。Ⅵ層は灰黄色土を含むにぶい黄橙色土で、Ⅵb層の方が灰黄色土の割合が多い。Ⅶ層は粘性の高いにぶい黄橙色～にぶい橙色土である。

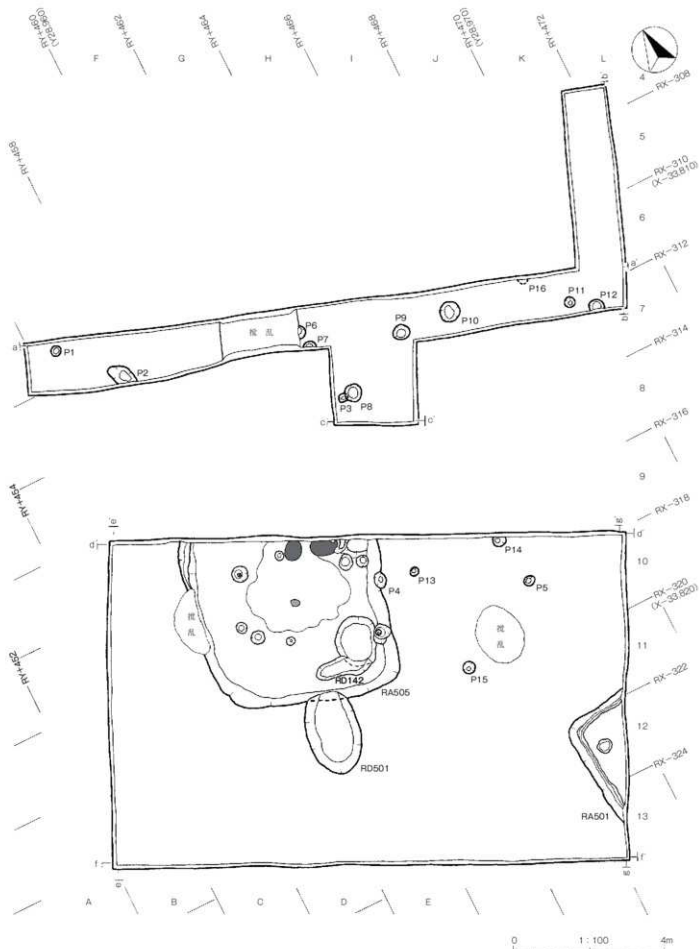
検出状況 調査区内は、過去の造成等で削平や盛土されており、検出面は場所によって異なるが、表土・盛土及び耕作土等のⅠa・Ⅰb層を除去したⅡa～Ⅴb層上面で遺構検出作業を行った。南北西調査区東側は、当初古代の遺物を多く含むⅡa層上面での検出を試み、遺物が集中する箇所を中心に遺構として精査を行ったが、遺構壁面の立ち上がり等が確認されなかったため、古代の遺物包含層としての精査に切り替えた。古代の遺構については、そのⅡ層下のⅢ層上面で再度検出作業を行った。古代以前の遺構については、Ⅳa層～Ⅴb層の各層上面で検出作業を行った。

検出遺構 傾斜地であるため、本来の遺構掘込面（当時の生活面）は既に削平されていると思われる。特に斜面上方では、Ⅰa層直下がⅤb層となり、削平が顕著である。検出された遺構は、平安時代の堅穴建物跡2棟（R A501・R A505）、古代の土坑1基（R D501）、時期不詳の土坑1基（R D142）、縄文時代以降のビット16口、縄文時代早期から平安時代の遺物包含層である（第4・5・7・14・15図）。

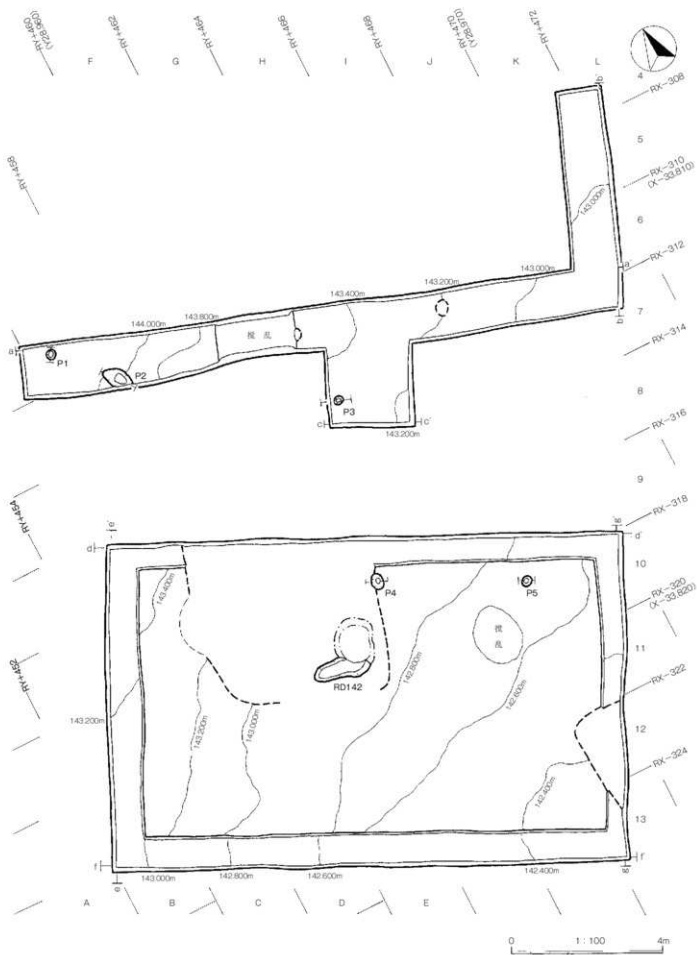
出土遺物 出土遺物の時代・時期は、平安時代の須恵器・あかやき土器・土師器が主体で、縄文時代早期初頭・中葉、縄文時代後期、縄文時代晩期の縄文土器・石器、弥生時代後期の弥生土器、近世の陶磁器などである。遺物総数は収納コンテナ（54cm×34cm×15cm）3箱分である。以下、各遺構等について記述を行う。



第3図 山王山遺跡全体図



第4図 山王山遺跡第15次調査全体図（検出遺構）



第5図 山王山遺跡第15次調査全体図 (IV a ~ V b 層上面)

4 検出された遺構と遺物

(1) 縄文時代から古代以前の遺構

遺構検出状況 (第5図)

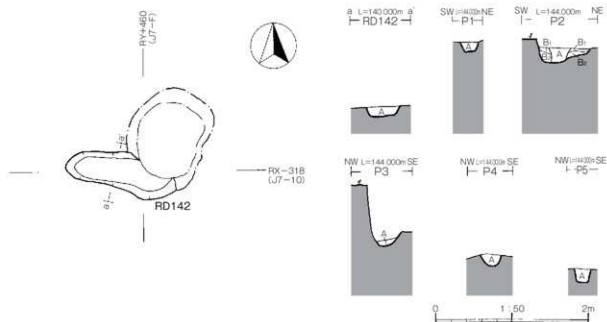
土坑1基とビット5口が確認された。南調査区中央で検出したRD142土坑は、埋土の状態などから縄文時代から古代以前のものとした。

RD142土坑 (第6図)

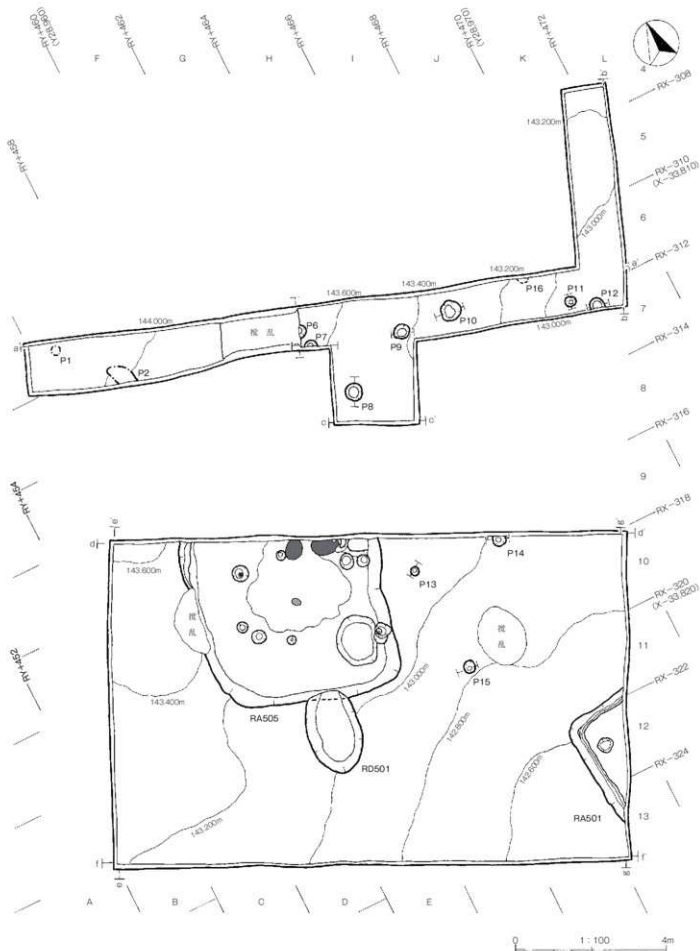
位置	南調査区中央 (J7-E9区)	平面形	不整形円形
規模	長軸-上端1.50m以上, 下端1.32m以上, 短軸-上端0.48m以上, 下端0.33m以上		
重複関係	RA505 (新)	掘込面	RA505構築により削平
埋土	粉~小塊状の黒褐色土を含む暗褐色土で、スコリア粒を少量含む。後述するRA505の構築土よりも総まりがある。		
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.12~0.13mで外傾して立ち上がる。長軸北東部はRA505の貯蔵穴により削平されており、確認できない。		
床の状態	Vb層を掘り込んで底面とし、中央がやや深くなる。		
出土遺物	なし	時期	不詳 (縄文時代から古代以前か)

ビット群 (第5・6図)

北・南調査区で5口検出している (第5図)。検出面はVa層上面及びVb層上面である。北調査区西側は表土直下がVb層で、掘込面が大幅に削平されている可能性が高いため、古代以前のものとして報告する。埋土は黒色~黒褐色土を主体とし、暗褐色~褐色土を少量含む。各ビットの規模及び検出面からの深さは、P1-径0.24m、深さ0.13m・P2-径0.45~0.70m以上、深さ0.18m・P3-径0.23m、深さ0.05m・P4-径0.30m~0.40m、深さ0.16m・P5-径0.20m~0.28m、深さ0.18mである。



第6図 RD142土坑, ビット



第7図 山王山遺跡第15次調査全体図(Ⅲa・Ⅲb層上面)

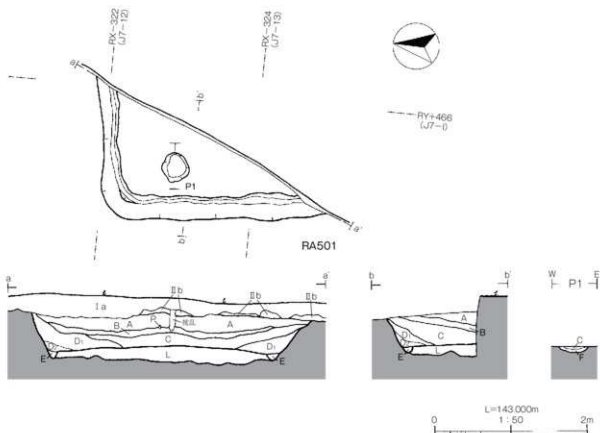
(2) 古代の遺構・遺物

遺構検出状況（第7図）

平安時代の竪穴建物跡2棟（RA501, RA505）、古代の土坑1基（RD501）、ピット11口が確認された。各遺構埋土には、遺構埋没時の流れ込みと考えられる縄文時代や弥生時代の遺物が混入するが、これらの遺物は遺構外出土遺物として扱った。

RA501 竪穴建物跡（第8図）

位置	南調査区南東（J7-H12区）	平面形	方形（調査区外）	主軸方向	-
規模	西-東1.95m以上（調査区外）、南-北2.95m以上（調査区外）				
重複関係	なし	掘込面	削平	検出面	Ⅲa層上面
埋土	自然堆積でA～D層に大別され、D層はさらに2層に細分される。 A層-黒褐色土を主体とし、小粒状の暗褐色土を少量含む。 B層-黒色土を主体とし、小粒状の暗褐色土を微量含む。 C層-黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色土を少量含む。 D層-黒褐色土を主体とし、小粒～大粒状の褐色土を少量含む。D ₁ 層はD ₂ 層より褐色土を含む割合が多く、D ₂ 層は焼土粒を微量含む。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.38～0.44mで、外傾して立ち上がる。壁際には幅0.08～0.16m、深さ0.08mの周溝がめぐる。埋土（E層）は黒色土を主体とし、塊状の褐色土を少量含む。				

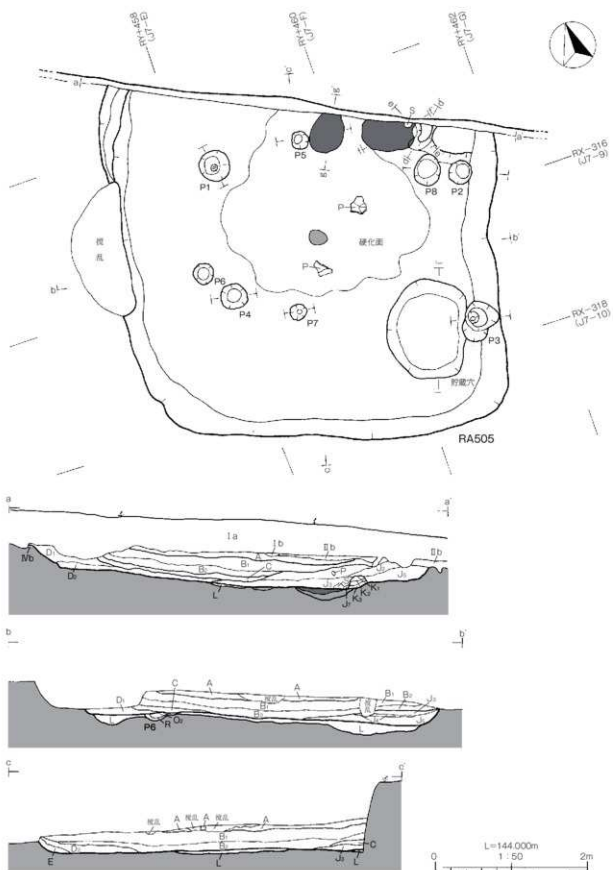


第8図 RA501 竪穴建物跡

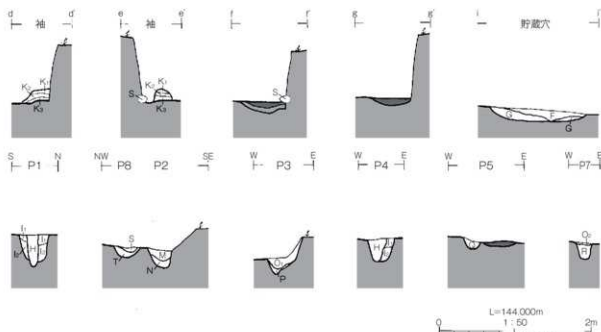
床の状態	ほぼ平坦であるが、南側は傾斜してやや低くなる。床構築土（L層）は小～大塊状の褐色～黄褐色土を主体に、黒色～黒褐色土を少量含み、硬さがある。層厚は0.07～0.18mである。
柱 穴	中央にピット1口を検出している。径0.34～0.38m、深さ0.08mで柱痕跡は確認されない。埋土は上層が建物埋土C層である。F層は黒色土を主体とし、小塊状の褐色土を少量含む。
出土遺物	図示していないが、あかやき土器坏や土師器坏・甕などが出土している。
時 期	9世紀後半

RA505 竪穴建物跡（第9・10図）

位 置	南調査区北西（J7-E8区）	平面形	不整形	主軸方向	-
規 模	北西-南東5.20m、南西-北東4.50m以上（調査区外）				
重複関係	R D142・R D501（古）	掘込面	削平	検出面	Ⅳb～Ⅲa層上面
埋 土	A～E層に大別され、B・D層はさらに2層に細分される。 A層-黒色土を主体とし、小塊状の黒褐色土と小粒～中塊状の灰白色火山灰を少量含む。 B層-黒色土を主体とし、粉状の黒褐色土を少量含む。B ₁ 層は黒色土の割合が多く、B ₂ 層はやや硬く微量の焼土粒及びカーボン粒を含む。 C層-黒色土を主体とし、粉状の黒褐色土を少量、塊状の焼土を多量に含む。 D層-黒色土を主体とし、D ₁ 層は粉～小塊状の暗褐色土を微量、D ₂ 層は少量含み、さらにD ₂ 層は小粒状の黒褐色土を微量含む。 E層-暗褐色土を主体とし、小粒～塊状の暗褐色土を多く含む。小粒状のスコリアを微量含み、やや硬さがある。				
壁の状態	検出面から床面までの深さは0.22～0.45mで、緩やかに外傾して立ち上がる。				
床の状態	中央に硬化面が広がる。ほぼ平坦だが南東側がやや低くなる。床構築土（L層）は褐色土に小粒～小塊状の黒褐色土を多く含みやや硬く、層厚は0.02～0.17mである。中央部から北側にかけて床面に熱浸透層を3か所確認している。				
カ マ ド	北東隅付近に構築される。火床面や支脚に使用されたと考えられる石材の位置、残存する基底部の一部を確認したが、煙道・煙出しは調査区外のため未確認である。火床面は不整形な円形（一部調査区外）で、熱浸透層は厚さ0.15mである。カマド崩壊土（J層）は7層に細分され、J ₁ 層は黒色を主体とし、粉状の暗褐色土、砂質のにぶい黄褐色土を含み、焼土粒を少量含む。J ₂ 層は黒色土を主体とし、小粒～中塊状の褐色土、非常に硬い明赤褐色土塊を少量含む。J ₃ 層はにぶい黄褐色土を主体とし、粉～塊状の明赤褐色土及び焼土粒を多量、粉状の黒色土を微量含みやや粗い。J ₄ 層は黒褐色土を主体とし、粉状の暗褐色土を微量含む。J ₅ 層は黒褐色土を主体とし、粉状の暗褐色土を少量、小粒状のにぶい黄褐色土を微量含む。J ₆ 層は暗褐色土を主体とし、粉状の黒褐色土を少量含みやや粗い。J ₇ 層はにぶい赤褐色土を主体とし、小粒状の黒褐色土を少量含む。J _{1-3,5} 層は攪乱されており粗く締まりがない部分が多く見受けられる。また、カマド本体の破片とみられる被熱して非常に硬くなった粘土塊を多く含んでいる。他中央部北側で強く被熱した熱浸透層を確認しているが、基底部は確認されず、旧カマドの火床面の可能性がある。				
貯 蔵 穴	南東隅近くに構築される。埋土はF・G層に大別され、F層は黒色土を主体とし、小塊状の暗褐色土、粉～小塊状の褐色土を微量含む。G層は小粒状の黒色土を含む黒褐色土を主体とし、カー				



第9図 RA505竪穴建物跡(1)



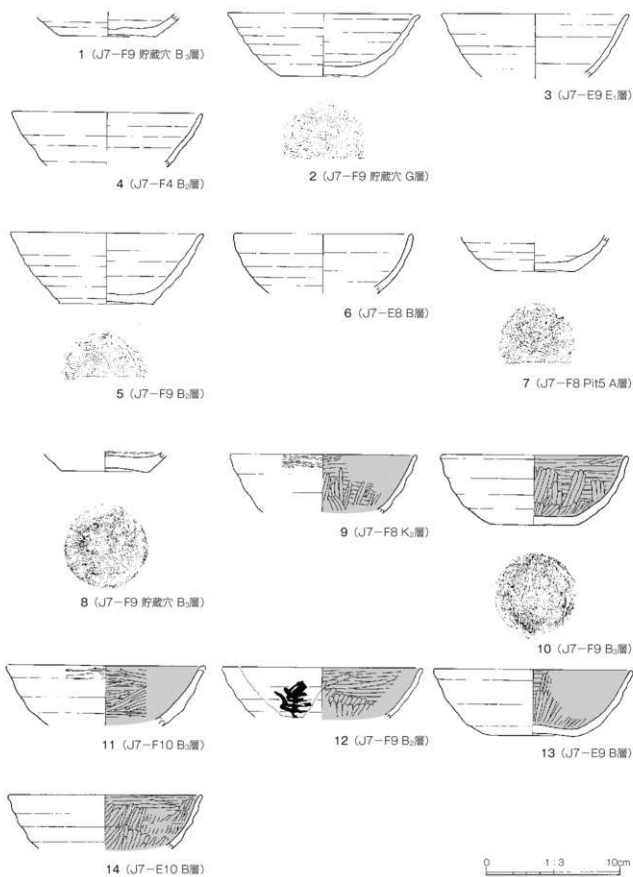
第10図 RA505竪穴建物跡(2)

ボン粒を微量含む。平面形は不整楕円形で、規模は径1.05m～1.35m、床からの深さは0.15mである。

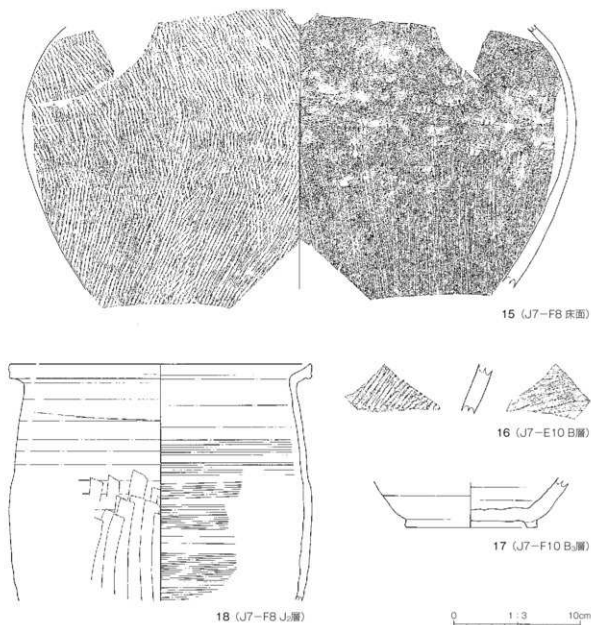
柱 穴 床面にピット8口を検出している。主柱穴はP1～4で、柱痕跡はP1・4で確認される。柱痕跡埋土(H層)は黒褐色土を主体とし、小粒～小塊状の褐色土を微量含む。掘方埋土(I_{1,2}層)は黒褐色土を主体とし、粉～塊状の暗褐色～褐色土を多く含みやや硬く締まる。各ピットの規模は、P1－径0.41m、深さ0.42m。P2－径0.30～0.32m、深さ0.32m。P3－径0.45～0.54m、深さ0.31m。P4－径0.32～0.36m、深さ0.40m。P5－径0.22～0.24m、深さ0.13m。P6－径0.36～0.38m、深さ0.08m。P7－径0.21～0.23m、深さ0.22m。P8－径0.34～0.42m、深さ0.13m。埋土はH・I、M～T層である。M層は黒褐色土を主体とし、小粒状の暗褐色土を微量含む、やや粗く軟らかい。N層は黒褐色土を主体とし、小塊状の黒色土を微量含む。O層は黒色土を主体とし、O₁層は小粒状の黒褐色土を少量、O₂層は微量含む。P層は暗褐色土を主体とし、小塊状の褐色土を多く含みやや粗い。Q層は黒褐色土を主体とし、塊状の褐色土と砂質の暗褐色土を少量含む、やや粗く軟らかい。R層は暗褐色土を主体とし、塊状の黒褐色土を少量含む、やや硬く締まる。S層は黒褐色土を主体とし、砂質のにぶい黄褐色土を含みやや粗く軟らかい。T層は黒褐色土を主体とし、粉～中粒状の暗褐色土を少量含む。

出土遺物(第11・12図) 1は須恵器環で、底部回転糸切無調整である。2～7はあかやき土器環で、2・5・7は底部回転糸切無調整である。8～14は土師器環で、いずれも内面に黒色処理とヘラミガキが施される。8・10は底部回転糸切無調整、13は回転糸切後に再調整を行っている。12は体部外面に墨書文字「(逆)か」が認められる。15・16は須恵器甕である。15は外面に平行タタキ目、内面下半にヘラナデを施し、上半に工具痕が残る。16は内外面に平行タタキ目を施す。17は須恵器甕である。18はあかやき土器甕である。外面下半にヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。その他図示していないが、あかやき土器高台坏片や土師器瓶片などが出土している。

時 期 9世紀後半



第11圖 RA505 竪穴建物跡出土遺物 (1)



第12図 RA505 竪穴建物跡出土遺物(2)

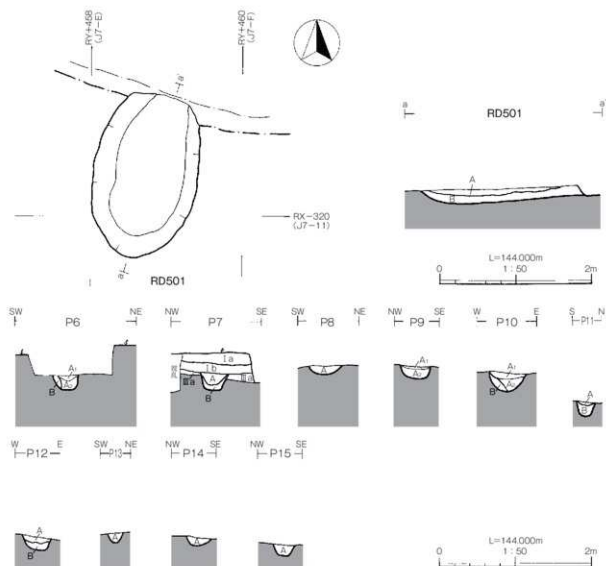
RD501 土坑 (第13図)

- 位置 南調査区中央 (J7-E10区) 平面形 不整楕円形
 規模 長軸-上端2.18m以上, 下端1.90m以上, 短軸-上端1.38m, 下端0.92m
 重複関係 RA505(新) 掘込面 削平 検出面 IIIa層上面
 埋土 自然堆積でA・B層に大別される。
 A層-黒褐色土を主体とし, 粉~小粒状の暗褐色土を少量含む。
 B層-暗褐色土を主体とし, 小粒~大粒状の褐色土を少量含む。

壁の状態	検出面から床面までの深さは0.12～0.19mで、緩やかに外傾して立ち上がる。
床の状態	Ⅳa層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦であるが南側が若干低くなる。
出土遺物	図示していないが、古代の土師器甕片や縄文時代早期初頭の無文土器片が出土している。
時期	古代

ビット群 (第7・13図)

北・南調査区で11口検出している。検出面はⅢa層及びⅢb層上面である。埋土Aは黒色～黒褐色土を主体に暗褐色土を少量含み、B層は暗褐色土を主体とする。ビットから出土した遺物は、弥生土器片、土師器片である。各ビットの規模及び検出面からの深さは、P 6 - 径0.31m、深さ0.18m・P 7 - 径0.30m、深さ0.18m・P 8 - 径0.42m～0.45m、深さ0.10m・P 9 - 径0.38m～0.43m、深さ0.16m・P 10 - 径0.52m、深さ0.24m・P 11 - 径0.27m、深さ0.18m・P 12 - 径0.38m、深さ0.16m・P 13 - 径0.20m、深さ0.11m・P 14 - 径0.32m、深さ0.09m・P 15 - 径0.32m、深さ0.24m・P 16 - 径0.23m、深さ0.22mである。



第13図 RD501土坑、ビット

(3) 遺物包含層・遺構外出土遺物

当調査区では縄文時代から古代の遺物包含層が自然堆積で形成されており、特に縄文時代早期、弥生時代後期、平安時代を主体とした遺物が出土している。

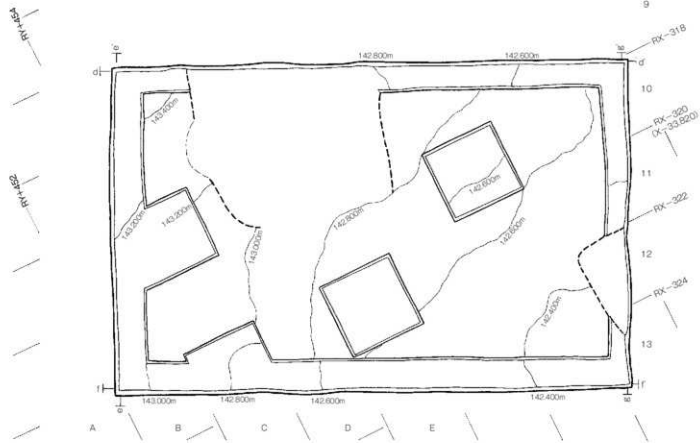
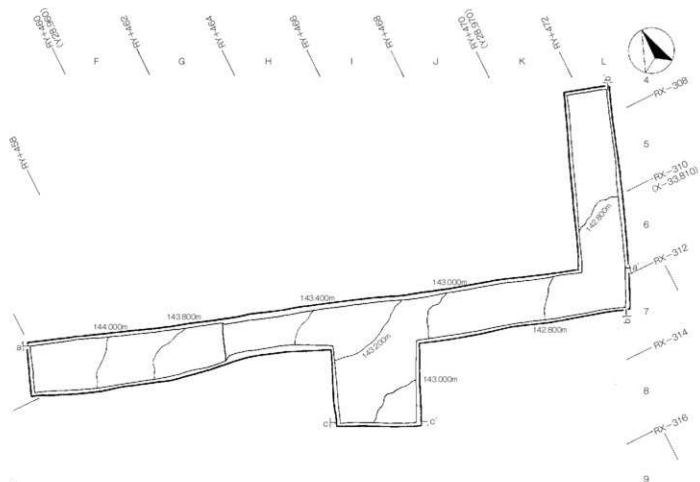
IIa・IIb層は古代の遺物を多く含む層で、南北両調査区の中央付近から東側に向かって厚く堆積している。調査区西側は削平されたとみられる。遺物が集中する箇所が認められたため、調査開始当初は遺構として精査を行っていたが、明確な床面や壁の立ち上がりが確認されず、遺物が集中する箇所以外にも比較的広範囲で遺物が出土したため、遺物包含層として精査を行った。古代の遺物の他に縄文時代・弥生時代の遺物も含まれる。

III層は南北両調査区で確認できるが、南調査区でより厚く堆積している。IIIa層は弥生時代の遺物を含んでおり、遺物が出土したのは南調査区北東側である。弥生時代の遺物の他に、縄文時代早期の遺物も僅かに出土している。

IVa層は南北両調査区で確認できるものの、縄文時代早期中葉の遺物が出土したのは南調査区の南半部のみである。遺物が出土した箇所周辺は、北西方向から南東方向に向かって沢状にやや低く窪む地形となっていたため、遺物が集中したと考えられる。IVb層は縄文時代早期初頭の無文土器を包含するとされる層である。北調査区では全面にわたって精査を行ったが遺物は確認されなかったため、南調査区では2×2mグリッドを数箇所深掘りして遺物の有無を確認したが、遺物は確認されなかった。このことから面的な精査はIVb層上面にとどめている。

この他、遺構外出土遺物として古代の遺構や表土・攪乱から、縄文時代早期初頭・中葉、弥生時代後期、古代、近世の遺物が出土している。

- 層 位
- I層 - I a層は盛土・表土・旧表土層で、複数回盛土された箇所も確認されたが、それらをまとめてI a層としている。I b層は旧耕作土層である。
 - II層 - 黒色土を主体とし、粉～小塊状の黒褐色土をII a層は微量、II b層は少量含む。南北両調査区中央付近から東側に堆積し、主に古代の遺物を含む。
 - III層 - 暗褐色土を主体とし、粉～塊状の黒褐色土少量含む。III b層はスコリア粒・カーボン粒を微量含む。弥生土器が出土している。
 - IV層 - 暗褐色土を主体とし、粉～塊状の褐色土を小～中量、スコリア粒を少量含む。IV a層は縄文時代早期中葉の遺物を僅かに含み、やや堅さがある。IV b層は褐色土を含む割合が多く、硬く締まる。IV c層は褐色土を含む割合が少なく、他の2層に比べてやや暗い暗褐色土を主体とし、硬く締まる。
 - V層 - 褐色～明黄褐色土を主体とする層で、Va層は径1～10cm程の礫を含み、南調査区南東部分のみ確認している。Vb・Vc層は塊状の暗褐色土を含み、Vb層はVa層より多く含む。スコリア粒を含みともに硬く締まりがある。
 - VI層 - にぶい黄褐色土を主体とし、灰黄褐色土を含む層である。スコリア粒を多く含み、非常に硬く締まりがある。VI b層は灰黄褐色土を含む割合が多く、さらに硬い。
 - VII層 - にぶい橙色～にぶい黄褐色粘土層で、土質は緻密である。



第14図 第15次調査区全体図（最終面）

縄文時代の土器（第16図19～24）

早期初頭 19は早期初頭の無文土器である。外面には剥離が見られるが、器面にナデ調整を施している。胎土に石英などの砂粒を含む。

早期中葉 20は深鉢の口縁部から体部である。口唇部はやや丸みのある外削ぎ状で僅かに波状を呈す。口唇部から内面にかけてミガキ調整、外面に斜位の条痕文を施す。胎土に砂粒と微量の金雲母を含む。21～27は沈線・貝殻土器である。21は口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施し、外削ぎ状を呈す。胎土に砂粒を多く含む。22は外面に斜位の貝殻腹縁圧痕文を施す。胎土に微量の黒色鉱物を含み、焼成は良好で緻密である。23は上半に貝殻腹縁押引文を施し、下半には羽状ないし山形に貝殻腹縁圧痕文を施す。胎土に石英粒と黒色鉱物を微量含む。24は平行沈線文下に斜位の沈線文を組み合わせて施文する。焼成は良好で緻密、胎土に細かい石英粒を含む。25は斜位の平行する2条の沈線文に沿って貝殻腹縁文を施文する。胎土に砂粒と微量の黒色鉱物を含む。26は外面にミガキ調整を施し、直線及び曲線状の沈線文の交点に刺突を施す。胎土に細かい砂粒と黒色鉱物を含む。27は外面に縦方向のミガキ調整を施し、横位の平行する2条の沈線文に、弧状の沈線文を組み合わせて施文する。胎土に石英粒を含む。

後期 28は縄文時代後期の深鉢体部である。沈線文と磨消縄文を施文し、円形竹管文の中央に刺突を施す。胎土に砂粒と微量の金雲母を含む。

晩期 29は縄文時代晩期の鉢で、降沈線による工字文風の文様を施している。焼成は良好で胎土に白色鉱物と微量の金雲母を含んでいる。

縄文時代の石器（第17図）

48は削器で片面一側縁に調整を施している。49は搔器で、下端部に調整を施す。48・49ともに頁岩製である。50は敲石で一方が破損しているが、破損後も使用したとみられ、両端部に使用痕が確認できる。

弥生時代の土器（第16図30～47）

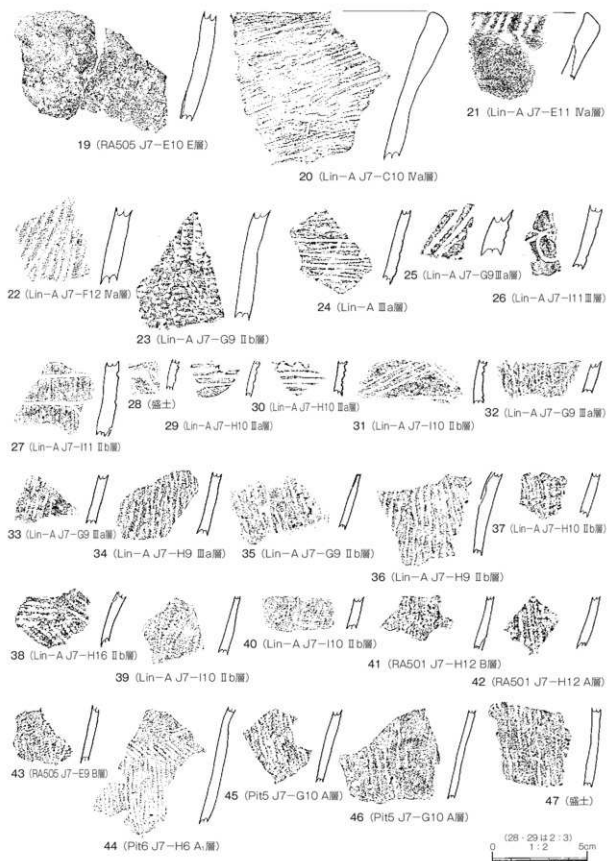
30～47は弥生時代後期の赤穴式期と考えられる甕の頸部～体部である。胎土に砂粒や白色鉱物を含むものが多く、外面には附加条縄文が施されるものが殆どである。30は交互刺突文と並行沈線を施文する。31は頸部で、横方向の沈線上に3条の沈線による鋸歯状沈線文を施文する。45は内面に炭化物が付着する。

古代の遺物（第18図51～56）

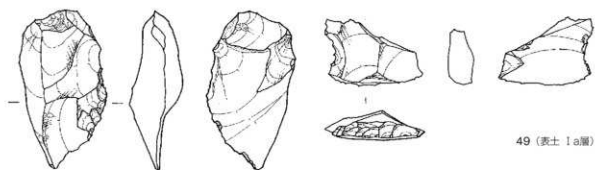
51～54は土師器環である。いずれも内面に黒色処理とヘラミガキを施す。51・52・54は底部回転糸切無調整である。52は体部下半にヘラケズリ調整を施し、底部に工具と考えられる圧痕が残る。53は体部外面に墨書文字（「不明」）が認められる。55は須恵器の甕で、内外面に平行タタキ目を施す。56は砥石で一方を欠損しているが、全面を使用している。その他図示していないが、あかやき土器環・高台環・甕片、土師器環・甕片などが出土している。

近世の遺物（第18図57～59）

57は花古焼と考えられる染付の丸皿で、底部のみ残存する。19世紀以降と考えられる。58は肥前染付の蕎麦猪口口縁部で、18世紀～19世紀のものと考えられる。59は18世紀台の肥前染付の丸皿で、口縁部から底部の一部のみ残存する。この他図示していないが、近現代にかけての陶磁器類も出土している。



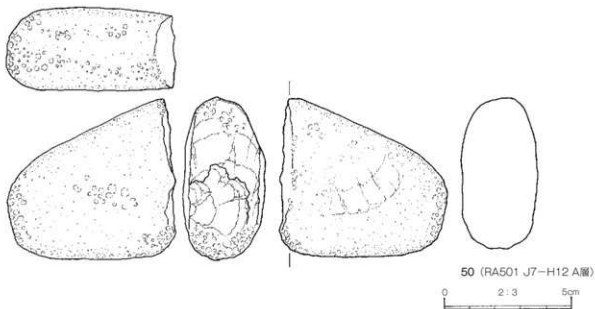
第16図 遺物包含層・遺構外出土遺物(1)



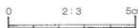
49 (表土 I a層)



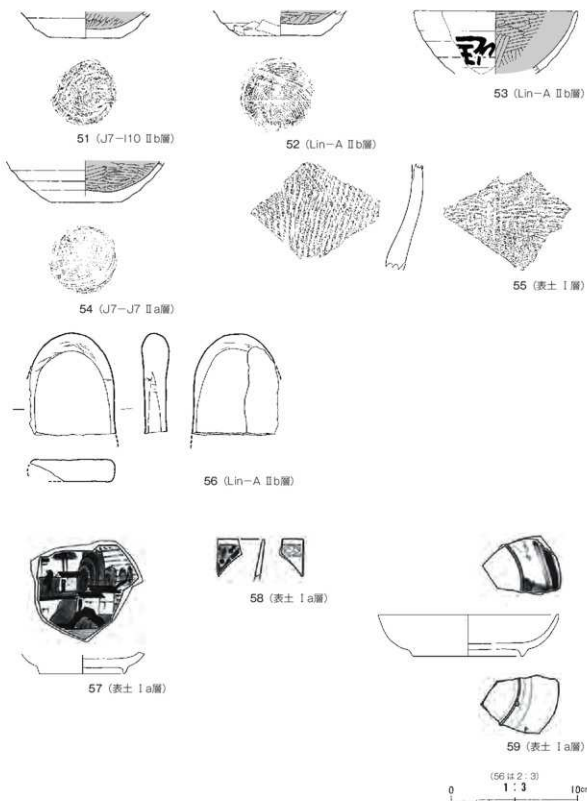
48 (Lin-A J7-E12 IVa層)



50 (RA501 J7-H12 A層)



第17図 遺物包含層・遺構外出土遺物(2)



第18図 遺物包含層・遺構外出土遺物(3)

Ⅲ 調査のまとめ

山王山遺跡第15次調査の結果、9世紀後半の集落が確認された。検出された遺構は、平安時代の竪穴建物跡2棟（R A501・R A505）、古代の土坑1基（RD501）、時期不詳の土坑1基（RD142）、縄文時代以降から古代のビット16口、さらに南調査区では縄文時代から弥生時代の遺物包含層、北調査区と南調査区の東側では古代の遺物包含層が確認された。出土遺物の時代・時期は、縄文時代早期初頭～中葉、後期、晩期の縄文土器・石器、弥生時代後期の弥生土器、古代の須恵器・あかやき土器・土師器・墨書土器・石製品などである。ここでは、主要な遺構・遺物について述べることにする。

遺 構 調査の結果明確に縄文時代に帰属すると判断できる遺構は確認されなかった。RD142については、R A505竪穴建物跡の床面での検出のため、堀込面は確認できず遺物の出土がなかったため時期の特定には至らなかった。しかし、周囲で確認している竪穴建物跡の埋土や構築土とは土質の違いが認められるため、古代以前の遺構の可能性があると推測される。

R A501竪穴建物跡は、その位置や出土遺物の時期から、第12次調査（盛岡市 2011）で確認されたR A501竪穴建物跡の北西隅部分であると判断している。

R A505竪穴建物跡の建物北辺は調査区外である。カマドに伴う煙道や煙出しは建物東壁面では確認されなかった。火床面やカマド袖の残存部分の位置から、カマドは建物の北東隅に構築され、煙道や煙出しは調査区外に存在すると推測される。また旧カマドの火床面と考えられる熱浸透層を確認しており、カマドの造り替えが行われたのではないかと推測している。この熱浸透層が旧カマドの火床面であるとするれば、火床面の位置や確認できている範囲の建物規模などから、調査区壁から比較的近い位置で建物北辺壁が立ち上がるものと考えられる。建物埋土上層には、十和田火山灰と考えられる灰白色火山灰が少量含まれており、遺構埋没時に流れ込み堆積したものと考えられる。また、埋土C層は焼土を多量に含んでおり、当初焼失家屋と思われるが、柱などの炭化材が殆ど見られないことや、黒色土が堆積した後に焼土が堆積していることなどから、建物埋没途中の窪地に投げ込まれたものではないかと推測される。

RD501土坑の埋土からは縄文時代早期初頭の無文土器片が出土しているが、検出面がⅢ層上面であることや古代の土師器片が出土していることから、古代の遺構と考えられる。

調査区内で確認されたビット群の一部からは弥生時代後期の赤穴式期の甕が出土している。ビット群に明確な規則性はみられず、各ビットは独立したものである可能性がある。これらのビット周辺では同時期の甕片が複数出土しており、中央に柱を立てテント状の屋根をかけた建物だった可能性もあるが、明確なプランは検出されなかったため推測の域を出ない。また、ビットの堀込面はⅢa層上面と推測されるが、同時期の甕片がⅢa層中から出土していることを考えれば、ビットの時期は弥生時代よりも新しく、遺物は流れ込みである可能性も考えられる。

遺 物 遺物包含層のⅣa層及び遺構外からは、縄文時代早期初頭の無文土器、早期中葉の沈線・貝紋文土器が出土している。第16図19の無文土器は平安時代のR A505竪穴建物跡の埋土から出土しているため流れ込みではあるもの、山王山遺跡では過去にも無文土器が出土しており、周辺に早期初頭の遺構が存在している可能性を示唆している。21～27は沈線・貝紋文土器群2（盛

岡市遺跡の学び館 2009) に該当し、21～24は外削ぎ状の口唇部や貝殻腹縁文など寺の沢式の特徴を持つ。25～27は沈線の交点に施される刺突や、沈線に平行する貝殻腹縁文、ミガキ調整など、物見台式の特徴がみられる。20は出土層位から寺の沢式期に該当すると思われるが、波状を呈す口縁部やミガキ調整など、物見台式に近い可能性もある。

弥生時代後期の赤穴式の土器が比較的多く出土している。胎土や焼成が似通っている遺物もあるものの、接合したものはなく同一個体とは断定できない。過去の調査でも同時期の土器が出土していることを踏まえれば、周辺に当該期の遺構が存在する可能性が考えられる。

墨書土器がR A505堅穴建物跡及び遺物包含層から出土している。第11図12は正立状態で1文字書かれており、「上」に「羊」と読み取るとすれば「逆」や「送」などといった文字が考えられる。第18図53は伏せた状態で書かれているとみられるが判読出来ない。

まとめ 南側に隣接する第10次調査では、遺物包含層から縄文時代早期の遺物が多量に出土したため、その斜面上方にあたる今回の調査で、当該期の堅穴建物跡などの遺構が確認される可能性があること予測していたが、調査の結果、居住域に関わるような遺構は確認されなかった。また、縄文時代早期の遺物包含層は、その第10次調査に比べ調査面積に差があるものの、やや希薄になることがわかった。本調査区の斜面上方にあたる第14次調査でも縄文時代早期中葉の遺物が出土しており、そのことを加味すれば、当該期の居住域は密集することなく比較的広範囲にわたっていた可能性もある。また、第5次調査で当該期のものと考えられる土坑が確認されていることから、第5次調査区周辺もしくはさらに丘陵頂部に近い地域だった可能性も考えられるが、いずれも推測の域を出ず今後の調査事例の増加が待たれる。

今回の調査で確認された堅穴建物跡2棟は、第10次・12次・13次調査で確認されている平安時代の堅穴建物跡群と一連のものと考えられる。また、縄文時代に帰属する遺構が確認されず、遺物包含層が確認されたことで、遺跡東部の緩斜面上には縄文時代早期の遺物包含層が形成され、平安時代の堅穴建物跡群が分布するなど、遺跡内の遺構分布が時代によって異なるというこれまでの調査結果に沿う内容となった。

(引用・参考文献)

- 雄山閣出版株式会社 1996 『日本土器辞典』
小林達雄 編 2008 『総覧 縄文土器』
福島正和 2013 『貝殻・沈線土器の型式学的研究－岩手県気仙郡住田町山脈地遺跡出土土器を中心に－』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 紀要XXXII』
財団法人岩手県埋蔵文化財センター 日本道路公団 1985 『小井田山遺跡発掘調査報告書』
財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1999 『山王山遺跡第9次発掘調査報告書』
宮城開発株式会社 盛岡市教育委員会 2008 『薬師社脇遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書－』
盛岡地区広域消防組合 盛岡市教育委員会 2014 『新茶屋遺跡－盛岡中央消防署山岸出張所庁舎建設に伴う発掘調査報告－』
盛岡市教育委員会 2000 『盛岡市内遺跡群－平成11年度発掘調査報告書－』
盛岡市教育委員会 2011 『盛岡市内遺跡群－平成20・21年度発掘調査報告書－』
盛岡市遺跡の学び館 2009 『盛岡の縄文時代草創期～早期の土器文化』資料集II』

写 真 图 版



山王山遺跡第15次調査南調査区全景（北西から）



山王山遺跡第15次調査南調査区全景（精査完了）

第2図版



北調査区全景 (南東から)



RA501 竪穴建物跡全景 (西から)



RA505 竪穴建物跡全景 (西から)



RA505 竪穴建物跡あかやき土器出土状況



RA505 竪穴建物跡灰白色火山灰検出状況



RD501 土坑全景 (西から)



RD142 土坑全景 (南から)



遺物包含層貝殻文土器出土状況



RA505 竪穴建物跡出土 須恵器杯・瓶, あかやき土器杯, 土師器杯



RA505 竪穴建物跡出土
あかやき土器杯, 土師器杯, 須恵器甕



RA505 竪穴建物跡出土 墨書土器



RA505 竪穴建物跡出土 須恵器甕



RA505 竪穴建物跡出土 あかやき土器甕

第4図版



遺物包含層・遺構外出土 縄文土器



遺物包含層・遺構外出土 弥生土器



遺物包含層・遺構外出土 石器



遺物包含層出土 土師器坏



遺物包含層出土 墨書土器



遺物包含層出土 墨書土器（赤外線撮影）



遺物包含層・遺構外出土 須恵器甕, 砥石



I a層出土陶磁器

報告書抄録

ふりがな	さんのうやまいせき							
書名	山王山遺跡							
副書名	共同住宅新築工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	鈴木俊輝							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	石川和雄 盛岡市教育委員会							
発行年月日	2021年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	世界測地系				
山王山遺跡	岩手県盛岡市 山王町64-33、 64-34	03201	LE17-0068	39° 41′ 53″	141° 10′ 00″	2020.11.09 ～ 2020.12.22	140	共同住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山王山遺跡 第15次	集落	縄文時代 弥生時代 平安時代 古代以降 時期不詳 近世	遺物包含層 遺物包含層 堅穴建物跡 土坑 ピット 遺物包含層 土坑 ピット	2棟 1基 11口 1基 5口	縄文土器、石器 弥生土器 須恵器、あかやき土器、 土師器、砥石 陶磁器			
要約	今回の調査では、これまでの調査で確認されている平安時代の堅穴建物跡群と一連のものと考えられる堅穴建物跡2棟が確認された。また、縄文時代の居住域を示す遺構が確認されず、縄文時代早期の遺物包含層が確認されたことで、遺跡東部の緩斜面上には縄文時代早期の遺物包含層が形成され、平安時代の堅穴建物跡群が分布するなど、遺跡内の遺構分布が時代によって異なるというこれまでの調査結果に沿った調査結果が得られた。							

山王山遺跡

—共同住宅新築工事に伴う緊急発掘調査報告書—

2021年4月30日 発行

- 編集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605
- 発行 石川和雄 盛岡市教育委員会
- 印刷 川嶋印刷株式会社盛岡支社
〒020-0891 岩手県紫波郡矢巾町流通センター南三丁目9番2号
TEL 019-601-2733 FAX 019-601-2731